

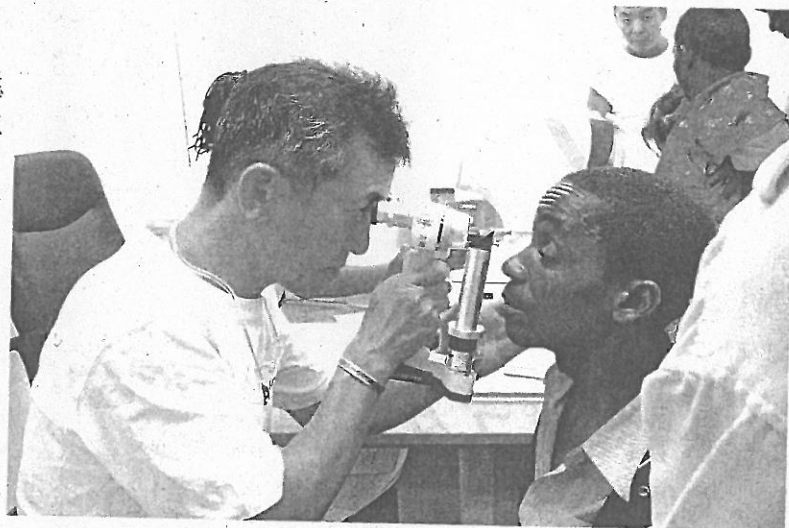
徳島大学病院眼科の内藤毅准教授(57)＝徳島市南佐古三番町＝が、アジアやアフリカなど眼科医療が遅れている地域への診療支援の輪を広げている。28年間に

わたって毎年現地を訪れているネパールをはじめ、モザンビークやモンゴル、エジプトで治療・手術、眼科医の育成に尽力。長年の支援が実り、12月には徳島大とネパールの国立大学の両医学部間で支援協定を締結する。

徳島大病院・内藤准教授

広がる眼科診療支援

途上国で手術・医師育成



モザンビークで眼科診療する内藤准教授
＝2011年8月、モザンビークの病院
(内藤准教授提供)

ネパールの医学部間で協定

12月
大学と

内藤准教授がネパール支援に取り組み始めたのは1984年。徳島大学病院を視察したネパールの国立トリバン大学教授から協力を求められたのがきっかけで、現地で開設したばかりの大学付属病院運営に携わった。

以降、毎年手術の機材を持ち込んで、無料で網膜疾患の診療や手術を実施。多いときには1日50人が訪れ、約30年間で数万人の患者に手術した。眼科医の育成にも取り組み、最初に訪れたときに20人程度だったネパール国内の眼科医は今では150人に。眼科病院では150人に。眼科病院もネパール医師だけで運営できるまでになった。

内藤准教授の活動で徳島、トリバン両大学の交流が深まり、2012年3月、両大医学部の眼科間で協定を締結。12月には協定の範囲を医学部全体に拡大する。学生や研究者の相互交流を通じて医療技術の向上を図る。

(大塚康代)